

マリア・サンブラーノの「注意」概念について

京都大学 江川 空

本発表の目的は、20世紀に活躍したスペイン出身の思想家マリア・サンブラーノ (María Zambrano, 1904-1991) の「注意 [atención]」概念を研究することにある。

それにしても、なぜ注意なのか。産業革命から現代までの社会を理解するうえで、注意は非常に重要な概念である。というのも19世紀後半以降、工場労働の効率化に伴い、仕事に対して長時間の注意をそそぐことが労働者に求められるようになったからだ。ここでの注意とは、ひとつの物事に対して意識を集中させることであり、工場労働に参入してゆく近代人にとっての前提条件であった。現代でもさかんに論じられているADHD(注意欠陥・多動症)は、この時期に前景化してきた病名である。ただ、20世紀の思想史をよく見てみると、そこには以上のような知覚の問題には還元されえない別の「注意」概念もまた存在していることがわかる。それが、サンブラーノの「注意」概念だ。

サンブラーノの思想についてはこれまでも、哲学から政治学、教育学の分野にいたるまでさかんに研究がつけられてきた。しかし、彼女の思想のなかで重要な位置を有する「注意」概念については従来、ほとんど論じられることがなかった。もちろん、それについて扱った研究が存在していないというわけではないが、そうした著作や論文のどれもが「注意」概念をいわば局所的に扱っており、その内実に深く入り込んでいるとは言いがたい。たしかに、注意はサンブラーノの著作において頻繁に登場する言葉ではないし、その意味自体がしばしば変遷を被っている。ただ、このような点を差し置いたとしても、注意が彼女の思想において一定の重要性を有していることは明らかである。というのも、サンブラーノは晩年のテキストのなかで注意を、自身の思想の鍵概念である「詩的理性 [razón poética]」とむすびつけて論じ、その重要性を強調しているからだ。サンブラーノによれば、注意とは、人間が自分自身の主体的能力をいったん退隠させることで、わたしたちをとりかこむ実在みずからがあるがまま現れるようにするための態度であり、そして芸術創造とりわけ詩は、そうした実在の現れを人間が受けとるという点にその本質を有している。こうしたサンブラーノの思想からは、従来とは異なる注意のあり方を見いだすことができるだろう。

以上のことを明らかにするために本論考ではまず、1950年代に執筆された著作を中心に扱い、注意と時間との関係を考察してゆく。つぎに第二節では、1960年代の著作に焦点を置き、注意が実在への開かれであり、人間の生の前提となっていることを論じる。さいごに第三節では、サンブラーノ晩年の著作を中心に扱い、注意が「詩的理性」とむすびつけられていることを確認し、詩とのつながりを明らかにする。